

幼稚園・保育所における散歩活動の実践例とその特色

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	48
ページ	1-13
発行年	2010
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000711/

幼稚園・保育所における散歩活動の実践例とその特色

A Practice Example and the Characteristic of Walking Activity in Kindergarten and Nursery School

菊 地 達 夫

Tatsuo KIKUCHI

I は じ め に

領域環境という言葉が、幼稚園教育要領と保育所保育指針に登場して約20年が経過した。それ以前のものでは、領域自然と領域社会に含まれており、必ずしも新しい内容として導入されたものではない。領域環境の考え方は、一定の地理的範囲（身近な地域）で生じる自然的事象と社会的事象を1つの空間の中で捉えていこうとするところに大きな特色がある。すなわち、自然環境や社会環境は、別々に存在するのではなく、有機的なつながりをもって構成されることによる。それ故に、社会環境が悪化することで、自然環境に悪影響を及ぼす実態が地球上の各地でみられるようになった。いわゆる地球環境問題である。具体的には、地球温暖化、大気汚染、水質汚染、土壌汚染、森林破壊、砂漠化など深刻な被害をもたらしている。また、ローカルスケールでは、住宅地、工場や観光施設の立地による緑地の減少、動物などによる人間への危害も頻繁に報告されるようになった。このような深刻な現象が、ようやく地球規模で議論されるようになったのが、1990年前後であった。領域環境は、そのような事情を含み新たに設定されたものである。また、小学校以上の各教科等でも、環境教育に関する指導書が作成されるようになった。こうした日本の教育界における環境教育の動きは、欧米諸国と比べ、かなり遅い。

ところで、領域環境の考え方に最も適する保育内容の1つとして、散歩活動を挙げることができる。散歩活動は、園外保育の代表的なものであるが、主として徒歩での移動を通じて、自然的事象や社会的事象に対して興味関心を向けさせる。加えて、散歩活動は、徒歩での移動を考えると領域健康、自然的事象や社会的事象に対する評価を考えると領域言葉、事後の保育活動を考えると領域表現、集団活動や地域の人々との触れあいを考えると領域人間関係の内容に含まれる。このようなことから、散歩活動は、総合保育としての役割も大きい。元々、幼稚園や保育所では、小学校以上の教科と違い、保育活動を通じて方向目標へ導くよう示されている。散歩活動の場合、領域環境に重きを置きながら、その他の領域内容を含めた保育活動として位置付けることができる。よって、保育活動の展開として、極めて望ましい。さらに、小学校教育との接続にも都合がよい。具体的には、生活科、理科、社会科などにつながる可能性が高い。生活科、理科、社会科の場合、いわゆる野外観察の学習活動があり、幼稚園や保育所での散歩

活動の経験を直接活かすことができる。とりわけ、五感の活用は、思考力を鍛えるものとして最適である。

本稿では、いくつかの幼稚園と保育所における散歩活動の実践例を述べ、どのような特色を持つのか、若干の検討をしようとするものである。具体的には、幼稚園教育要領と保育所保育指針における領域環境を取り上げ、散歩活動との関係を確認しておきたい。続いて、大都市、地方中核都市、地方小都市といった地域スケールに分け、調査対象とした保育機関の散歩活動の実態について明らかにし、地域間比較を交えながら、その特色を浮き彫りとする。最後に、散歩活動の実践例をみながら、領域環境「ねらい」「内容」の共通項目を確認する。

なお、事例とした調査の内容は、2009年時点のものである。

Ⅱ 幼稚園教育要領・保育所保育指針と散歩活動との関係

本章では、平成20年幼稚園教育要領と保育所保育指針の領域環境に関する「ねらい」と「内容」を手がかりに、散歩活動との関係を確認しておきたい。

今回の改訂では、幼稚園と保育所いずれも、大きな変化があった。幼稚園では、学校種の規定順が、これまでの最後「及び幼稚園」から最前「幼稚園、小学校～」に移動した。これは、就学前教育としての役割が一定の評価を受けたものと解釈できる。保育所では、保育指針の取扱いをこれまでの「児童家庭局長通知」から「厚生労働省告示」に改めた。よって、規範性が増し、幼稚園教育要領と同じ位置付けになった。

1 幼稚園教育要領の場合

幼稚園教育要領の領域環境のねらいは、3つ示されている。「身近な環境」や「身近な事象」という文言から、園外保育を想定したものである。例えば、身近な環境への親しみや自然との触れあいは、散歩活動中に会える河川、池、海、山、丘、森林などの見学や観察、自然公園では樹木や芝生などに触れることで実現できる。また、身近な環境に対する発見や思考は、小動物、建物や乗物に出会すことで結びつけることが可能である。とりわけ、園児は、「動くもの」に興味関心が高い。興味関心が高まることで発見や思考の揺さぶりもしやすくなる。さらに事象に対する性質や数量、文字などに対する感覚も、動植物との触れあい、標識や看板の観察などで鍛えることができる。

続いて、11の内容について確認する。(1)では、散歩活動中に会える植物、小動物、昆虫で気付くことができる。大きさでは、大型犬をみれば小型犬との比較で驚くにちがいない。美しさでは、開花した花びらの色模様が感動することができる。不思議さでは、昆虫の動きに凝視し、疑問を抱くこともあろう。

(2)では、交通機関の活用で関心をもたせることができる。信号機の歩行者用の押しボタンを押すと、やがて車道の信号機の「青」が「赤」に変わる。園児は、ボタンを押せば、車道の信号機が変わりやすいという仕組みに気付くことができるであろう。信号機は、散歩活動で比

第1表 平成20年幼稚園教育要領領域環境の「ねらい」・「内容」・「内容の取扱い」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

1 ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

2 内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 身近な物を大切にする。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。
- (2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。
- (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。
- (4) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

資料) 文部科学省『幼稚園教育要領』。

較的利用することが多いものと考えられる。

(3)では、四季ごとに散歩活動を取り入れることで容易に気付くことができる。人々の服装は、夏に向かえば軽装になるし、冬に向かえば重装になる。草木は、色が変わったり、花が咲いたり、枯れたりといった変化を確認することができる。

(4)では、草木を収集することで、事後に造形活動として遊ぶことができる。また、自然公園では、自然物の遊具、海岸では海水浴などのような遊びも想定できる。

(5)では、散歩活動中に会合す様々な生き物に接することで体験することができる。時には、生き物の死骸をみつけ、生命の尊さに気付くような場面もあるであろう。

(6)では、公園の遊具、図書館や博物館の資料など、公共物に接することで物の大切に気づかせることができる。公共物は、特定の人々のものではなく、共有して使うものである。そのようなことから、身近な物を大切にする意識が芽生えるであろう。

(7)では、公園の傾斜、河川敷の広場など園庭とは空間的、構成的に違うことがあり、それを活用することで体感できる。例えば、積雪寒冷地の公園では、人工の起伏が作られていることがあり、冬季にはそり遊びなどを楽しむことができる。

(8)では、数では、家の数、乗物の数、動植物の数、遊具の数など保育者の呼びかけに応じて興味関心を向けさせることができる。また、図形では、建物の形、遊具の形を活用することもできる。

(9)では、道路標識や店の看板などをみることで、意識させることができる。園内で取り上げた「標識」や「文字」に出会えば、園児の興味関心も高まるであろう。

(10)では、生活の関連が深い情報や施設として、保護者の方が利用するようなスーパー（店）、郵便局、病院、交番などの見学や利用が考えられる。とりわけ、施設内をじっくり見学できるような機会は少ないため、興味関心を深めることができる。

(11)では、年中行事や祭事の際、住居、店、施設などで国旗を掲揚していることがある。それに気付かせることで、年中行事や祭事に対する興味関心へも結び付けることができる。

内容の取扱いでは、周囲への環境に対する好奇心の広がり、物事の法則性の理解、動植物に対する感受性などについて、散歩活動を適度に行うことで十分に達成できる。

以上、散歩活動の関わりを中心に、11の内容について具体的な活動を例示してきた。例示した活動は、比較的にどの地域でも利用が可能なものである。それ故、散歩活動は、領域環境のすべての内容を含む活動であると解釈できる。

2 保育所保育指針の場合

保育所保育指針の場合、領域環境の内容は、幼稚園教育要領と若干異なる。従前の保育所保育指針では、「内容」と「配慮事項」を示していたが、今回より、幼稚園教育要領同様に「ねらい」と「内容」に改めた。加えて、従前では、発達年齢ごと（3歳児・4歳児・5歳児・6歳児）に示していたが、今回より、主として3歳以上の園児に共通するものとして1つにまと

めるようになった。

保育所の保育内容は、養護に関わるものと教育に関わるものに分けられている。ただ、保育活動では、これらを分けて行うのではなく、養護と教育を一体となって展開するよう示している。なお、領域環境は、教育に関わるものに属する。他の領域も、幼稚園教育要領の場合と同じである。

保育所保育指針における領域環境は、幼稚園教育要領と概ね同じであるが、「内容」の文言に多少違うところがある。ねらいは、3つあり、文言も幼稚園教育要領と同じである。内容は、幼稚園教育要領より1つ多い12項目で構成している。

以下では、12項目の内容の中で、幼稚園教育要領と違うところ（１）・（２）・（７）・（12）を中心に上げる。

（１）の文言は、安心できる人的を保育者、物的環境を散歩ルート of 安全確認、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうといった五感を散歩活動中の行為として置き換えることができる。また、五感の動きを豊かには、散歩活動を適度に行うことで達成することができる。よって、（１）

第2表 平成20年保育所保育指針領域環境の「ねらい」・「内容」

【教育に関わるねらい及び内容】

周囲の様々な環境に好奇心や探求心を持って関わり、それらを生活に取り入れいこうとする力を養う

ねらい

- （１）身近な環境に親しみ、自然と触れあう中で様々な事象に興味や関心を持つ
- （２）身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする
- （３）身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする

内容

- （１）安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の動きを豊かにする
- （２）好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ
- （３）自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く
- （４）生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ
- （５）季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く
- （６）自然などの身近な事象に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする
- （７）身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして生命の尊さに気付く
- （８）身近な物を大切にする
- （９）身近な物や遊具に興味を持って関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ
- （10）日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ
- （11）日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ
- （12）近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する

資料）厚生労働省『保育所保育指針』。

の内容は、散歩活動のことを述べているのに等しい。

(2) では、「好きな玩具と遊具」の部分が幼稚園教育要領と比べ、追記になっている。遊具の場合、公園における固定遊具を想定できる。固定遊具は、園庭内にもあると思われるが、種類、数、大きさなどで異なる点も多い。例えば、園庭内の固定遊具では、種類や数が限られ遊べなかった園児が、公園の固定遊具では積極的な活動をする場合がある。こうした場合、保育者が、園児の固定遊具に対する嗜好について気付かされることもあろう。すなわち、散歩活動先の公園での遊びが、そのような発見を保育者に与えたことになる。

(7) では、「作物を育てたり」と「味合う」の部分が幼稚園教育要領と比べ、追記になっている。作物を育てるとは、園内での活動を想定したものと思われるが、作物を育てる人の動きから感じ取ることもできるであろう。例えば、散歩活動中の農業従事者や家庭菜園者の様子、さらにはボランティア活動として、道端の花壇や草木を手入れする人の様子から気付くことができる。味合うでは、公園や公共施設において休息をとる中で食べる活動が行われるかもしれない。園外で食する場合、農業や酪農など生産地に近いところもあろう。農業用地や放牧される牛の様子を間近にみることで、農作物や乳牛に対する生命の尊さを知る機会になる。

(12) では、近隣の生活に興味関心をもたせるのであれば、徒歩行動が適しており、散歩活動につながる。また、祭のような地域行事では、散歩活動中に立ち寄ることで、露店を眺めたり、伝統芸能を見学したりといった部分参加するような形も考えられる。

以上、保育所保育指針の内容においても、幼稚園教育要領同様にほとんどの内容で散歩活動との接点を確認することができた。ただ、追記になっている部分に限れば、地域的には、散歩活動の中に取り入れることが難しいものもある。

Ⅲ 事例園における散歩活動の実態

1 事例園における地理的環境の概観

本章では、北海道内に位置するいくつかの幼稚園と保育所（保育機関）の散歩活動の実態を述べる。それをふまえ、事例とする保育機関が位置する地理的環境について概観したい。取り上げる保育機関は、5箇所であり、大都市（札幌市）2園、地方中核都市2園、地方小都市1園である。散歩活動の実態や特色を考察する上では、事例の数として不十分である。よって、今回は、散歩活動の実践例と都市規模別の傾向を浮き彫りとすることに留める。都市規模別は、園周辺における地理的環境に多少の違いがあると考え、区別することにした。散歩活動では、園周辺の地理的環境の違いにより、散歩ルートや活動先など大きく作用されるものと考えた。

大都市の事例園は、いずれも郊外にあり、新興住宅地内に位置する。それ故、他園と比べ、敷地面積が広い。幼稚園の方は、他グループ園として幼稚園2箇所と保育所2箇所を市外にもち、その中に総合事務局もある。保育所の方は、以前、都心部にあり、施設の老朽化や手狭になったこともあり、郊外に移転している。両園は、大都市に位置しながら、河川や林がすぐ近

第3表 幼稚園・保育所における散歩活動の実践例

回答項目	A 幼稚園	B 保育所	C 幼稚園	D 幼稚園	E 幼稚園
都市規模	大都市	大都市	地方中核都市	地方中核都市	地方小都市
年間の散歩回数	18回	144回	15回	30回	48回
散歩の多い時期	冬季以外	冬季以外	1～2月	夏季・秋季	冬季以外
ルート数	2コース	7コース	2ルート	4ルート	5ルート
所要時間	15分	90分	90分	90分	20分
こどもの人数	20人	21人	25人	44人	20人
引率保育者数	2人	3人	3人	3人	2人
対象となる事象	自然的事象	自然的・社会的事象	自然的・社会的事象	自然的・社会的事象	自然的事象
交通安全の留意点	横断歩道	歩道の歩き方	交通量の危険性、公園遊具での危険性、防犯	交通量の確認	交通ルールの確認
事後へのつなぎ	話し合い・造形活動	話し合い・造形活動	自然物を使った制作・生き物のキャッチとリリース	造形活動・地図製作	話し合い・造形活動
散歩の効果	こどもや教員は、多様な発見につながり、楽しんでいる 公園での遊びの後には、非 様々な環境に触れること での経験の充実度が満た せる 散歩活動の目的を明確化 すること、こどもの反 応はよく、人気も高い 散 歩 中 に は、 拾 っ て き た も の を み せ て く れ る。 園 内 の 活 動 が 続 く と 「 散 歩 に 行 き た い 」 と い う 声 が 多 く な る。 こ ど も や 教 員 共 に 自 然 を 体 感 し、 楽 し ん で い る				
現状の課題	なし	ケガの心配・防犯対策	時間（回数）の確保	交通安全・防犯対策・引率教員の不足・時間の確保	行事との時間的調整

資料) 聞き取り・アンケート調査。
注意) 回答結果の数や時間は、いずれも最大のを示している。また、散歩回数は、1クラス（1グループ）の積算したもの。

隣にあり、周辺の地理的環境は緑地に恵まれている。一方、近隣を走る幹線道路は、工場施設が周辺に位置することもあり、大型車の往来が多い。よって、郊外にある閑静な住宅地街のイメージとはやや異なる。

地方中核都市の事例園は、いずれも道東方面の同じ都市に位置する。1つは、都心部に位置する幼稚園である。周辺には、徒歩圏内に商店街や繁華街があるものの、交通量が少ないこともあり、閑静な環境にある。もう1つはやや郊外に位置する幼稚園である。道路を挟み向かいに、小学校と中学校が位置し、文教的な地区を形成している。また周辺は、閑静な住宅地が広がる。ただ、小学校と中学校の後方に自衛隊の駐屯地が広がり、地理的には遮断されている。さらに、近隣には、比較的大きな都市公園が、2箇所位置する。

地方小都市の事例園は、地方中核都市に隣接する行政区に位置し、地方中核都市の郊外といった地理的環境に近い。周辺には、大型商業施設が林立し、地方中核都市からの入り込みも多い。よって、近隣の幹線道路は、大型車をはじめ交通量は多い。事例園は、幹線道路からやや外れた高台に位置し、周辺は閑静な住宅街を形成している。

2 散歩活動の実態

本節では、事例園5箇所の散歩活動について、各園の様子を項目ごとに述べる。なお、散歩活動の項目別の概要をまとめたものは、第3表に示すとおりである。

A園は、大都市に位置する幼稚園である。年間の散歩活動の回数は、18回であり、月平均にすると1～2回程度となる。散歩活動の多い時期は、5月から10月までの半年間であり、春季から秋季までの活動となっている。散歩ルートは2コースある。コースは、園周辺の遊歩道を利用してのものであり、畑地も分布する。自然環境に恵まれていることから、四季の変化の観察には適している。コースの違いは、年齢に応じて近いコースと遠いコースに分けたものである。所要時間は、近いコースで10分、遠いコースで15分と大きな差異はない。散歩活動の園児数は、20名程度である。それに対する引率教員は、1～2名となっている。年少組は、2名体制としているが、年中組と年長組は担任1名体制が多い。散歩ルートは、自動車道路脇をほとんど通らないため、年中組以上では1名体制となっている。そのため、自動車道路の横断や歩道を歩行する時には、必ず補助教員が引率する体制になっている。散歩活動では、畑地や河川が視界に入るため、草木、花の他に農作物、川、鳥の鳴き声などに興味関心を得られるよう工夫をしている。交通安全では、自動車道路を横断する場合、事前にしっかり説明し、活動するようにしている。散歩活動後には、それぞれ見聞きしてきたことを発表したり、絵を描いたり、自然物を利用して遊び道具を作るような造形活動をしている。散歩活動の効果として、多様な発見をこどもと教員共に楽しむことができることを指摘している。現状の課題については、今のところない。

B園は大都市に位置する保育所である。すべての園児クラスを併せた散歩活動は、576回に達する。1クラスあたりの平均数では、144回になる。散歩活動の多い時期は、春季から秋季

までの間である。冬季でも散歩活動ではないものの、外遊びをほぼ毎日行っている。散歩ルートは、7コースをもつ。その中には、デコボコ道や草原を通るようなコースもある。コースは、交通安全や公園における遊具の状態を担当間で情報交換しながら立案している。所要時間は、概ね90分であるが、週1回弁当の日があり、それを持って行く時には150分程度になる。散歩活動の園児数は、18人から21人の間である。それに対する引率教員は、2～3人となっている。1人の教員が担当する園児数として、7～9人程度となる。散歩活動では、公園遊び、食材などの買い出しなど行っている。公園では、草木の観察、小動物（昆虫）との触れあい、水遊び、固定遊具の活用をしている。食材などの買い出しは、料理保育の材料、畑作りの苗などをスーパーや苗物屋で購入している。その他にも、遠足として市内の山登り、川遊び、動物園の見学などに出かけている。交通安全では、歩道の端を歩くようにすること、先頭と最後尾が離れないようにすること、横断の際、自動車をよく確認することを注意している。散歩活動後では、絵を描いたり、発表したりする活動を取り入れ、次の保育へつながることを意識している。散歩活動の効果として、公園の広場で走り回るような遊びでは、終了後にとても充実した表情になっていると指摘している。そのため、公園への散歩活動は、人気が高い。現状の課題では、散歩中のケガや防犯対策を挙げている。引率教員は、必ず2人体制になるようにしている。また、障がい児を引率する場合、引率教員の加配や帰路の車利用で対応している。

C園は、地方中核都市に位置する幼稚園である。年間の散歩活動の回数は、15回であり、月平均1～2回程度となっている。散歩活動の多い時期は、1～2月となっており、雪遊びをする目的で集中的に行っている。散歩ルートは2コースある。ただ、1つはバス利用のものであり、現実には1コースと考えられる。所要時間は、30分から90分の幅はあるものの、徒歩移動の散歩では60分以内と想定される。散歩活動の園児数は、25人である。それに対する引率教員は、2～3人である。散歩活動では、草花、昆虫などの観察の他に公園での遊具遊びを行っている。遊具遊びでは、園庭にはない遊具で遊ぶことが多い。交通安全では、交通量が多い点、遊具の危険性、防犯対策に注意をしている。散歩活動後では、自然物を使った制作活動や生き物（昆虫）を捕獲し、その後に解放するような活動を行っている。散歩活動の効果として、様々な環境に接することで経験を広げられることを指摘している。現状の課題では、時間（回数）の確保に苦慮していることを挙げている。

D園は、地方中核都市に位置する幼稚園である。年間の散歩活動の回数は、30回となっている。散歩活動の多い時期は、夏季や秋季を挙げている。散歩ルートは、4コースある。コースは、学年担当で話し合いをし、雨天の代替えも同時に考え、指導計画案として作成されている。所要時間は、90分間である。散歩活動の園児数は、44人である。それに対する引率教員は3人体制となっている。散歩活動では、公共施設（市役所・警察署・動物園）、公園、競馬場、福祉施設、スーパーへの買い物などへ出かけている。交通安全では、交通量の多い場所で注意をし、交通安全教室も上手に活用している。散歩活動後では、地図作り、メダル作り（造形活動）、ウォークラリーの作成などを行っている。散歩活動の効果として、目的の明確化（活動先の特

定)により、こどもの反応がよいことを挙げている。現状の課題として、引率教員の不足、保育時間の確保、交通量の増加と防犯対策を挙げている。

E園は、地方小都市に位置する幼稚園である。年間の散歩活動の回数は、48回であり、月平均4回となっている。散歩活動の多い時期は、春季から秋季の間である。散歩ルートは、5コースある。コース立案では、交通量が少なく、自然を多く体感できることを考慮している。また、発達年齢に応じた距離や時間の長短を考え、その都度修正を行っている。所要時間は、20分間である。散歩活動の園児数は、20人である。それに対する引率教員は2人体制となっている。散歩活動では、公園での遊具遊び、小川での昆虫観察、草木の観察によって季節の変化を認識できるように行っている。交通安全では、交通ルールについてしっかり確認している。散歩活動後では、話し合い、自然物を使った制作、絵を描く活動を行っている。散歩活動の効果として、自然物などに対する興味関心の向上、散歩活動への園児の強い関心、こどもと教員共に自然を体感しながら楽しめることを指摘している。現状の課題では、行事との関係による時間の確保が難しいことを挙げている。

次節では、地域間比較において、どのような特色がみられるのか、検討したい。

3 地域間の比較

年間の散歩活動の回数では、幼稚園が20～50回程度であり、保育所が約3倍の約150回に達している。保育所が多くなる理由として、地域に関係なく、保育時間が長いこと、長期休暇が原則ないことを指摘できる。とりわけ、夏季休暇のある幼稚園とそれが無い保育所では回数の開きは大きくなりやすい。地域的には、大都市（都心部）で回数は少なく、地方小都市で回数は多い。地方中核都市に位置するC園も、都心部にあるが、最も少ない。都心部において、回数が減少する理由は、交通量の多さを指摘できる。とりわけ、事例園すべてにおいて、交通安全では、交通量に関係する事項を挙げている。当然、危険度の高い地域（都心部）では、減少することになるであろう。

散歩活動の多い時期は、概ね春季から秋季の間という結果を得た。これは、積雪寒冷地域の特性によるもので、冬季は一部例外を除き、ほとんど少ない。散歩ルート数では、概ね複数あった。ただ、幼稚園の場合、大都市で少なく、地方小都市で多い。この点も、交通量の多さを考え、コースを設定しているためと考えられる。園児数は、20～44人とやや幅が広い。20人前後は、1クラスの在籍数であり、担任の先生と補助教員が引率しているものと考えられる。若干多いD園の場合、2クラス合同で行い、クラス担任2人と補助教員1名の3人体制で実施している。よって、教員1人あたりの園児数は、概ね10人以下と考えられる。この点は、幼稚園と保育所との違い、地域間の違いはほとんどない。

対象となる事象では、自然的事象に重きを置く事例が多い。大都市では、自然的事象に触れる機会が少ない点、地方小都市では、自然的事象に恵まれている点を意識した可能性がある。その中間に位置する地方中核都市で、自然的事象と社会的事象の双方を取り入れている点は興

味深い。

散歩活動の効果では、地域間に関係なく高評価になっている。また、園児のみならず、教員も自然的事象との触れあいを通じて楽しめている点は、共同作業者としての役割を演じている。

現状の課題では、不審者の出没などの防犯対策と時間確保の難しさを挙げている。とりわけ、防犯対策は、大都市での課題となりがちであるが、昨今の報道では過疎地域でも被害はみられる。そのため、地域間の違いは、関係なくなっていると考えられる。

Ⅳ 領域環境「ねらい」「内容」における重視する項目

本章では、前章における散歩活動の実践例をみながら、幼稚園教育要領と保育所保育指針の領域環境「ねらい」「内容」における重視する項目を確認する。第2章で述べたように、散歩活動は、領域環境におけるすべての「ねらい」「内容」に含まれる。

他方、幼稚園や保育所は、小学校以上の教育機関と違い、教科等の枠組みがないため、保育活動全般において園による違いが生じやすい。幼稚園の場合、園児募集に力を入れるため、特色となるような保育活動を積極的に広報するようなこともある。そのような特色の1つとして散歩活動を位置付けることが少なくない。一方、散歩活動では、いずれの園でも重視する共通項目があると考えられる。ここでは、その点を浮き彫りにしたい。なお、以下の番号は、第1表と第2表に対応している。

A園の場合、ねらいでは(1)、内容では(1)、(3)、(4)が深く関係している。B園の場合、ねらいでは(1)～(3)、内容では、(1)、(2)、(3)、(4)、(6)、(7)、(9)、(11)が深く関係している。C園の場合、ねらいでは(1)、(3)、内容では(1)、(2)、(4)、(5)、(7)が深く関係している。D園の場合、ねらいでは(2)、(3)、内容では(1)、(2)、(4)、(7)、(8)、(9)、(10)が深く関係している。E園の場合、ねらいでは(1)、(2)、内容では(1)、(3)、(4)、(5)、(7)が深く関係している。

その結果、ねらいでは(1)、内容では(1)と(4)が共通するものとして挙げた。よって、散歩活動では、身近な環境を通じて自然と触れあう中で、自然的事象に対する興味関心を向上させようとしている。そのため、五感を使わせる保育者の工夫、事後に自然物を使った遊びや制作活動につなげようとしている。これらの項目が、散歩活動の中で、より重視しているものと考えられる。

Ⅴ お わ り に

本稿では、いくつかの幼稚園と保育所における散歩活動の実践例を述べ、どのような特色を持つのか、若干の検討をしてきた。以下では、第2章以降について、簡単に整理をし、最後に若干の考察した上で課題を述べる。

第2章では、幼稚園教育要領と保育所保育指針の領域環境「ねらい」と「内容」を取り上げ、散歩活動との関連を確認した。その結果、散歩活動は、3つの「ねらい」と11又は12の「内容」

すべてにおいて場面設定ができると考えられる。とりわけ、場面設定は、特定の地域に限るものではなく、全国各地における地域に根ざす教材を活用し、実現できるものである。ただ、保育所保育指針の一部の内容は、地域教材を活用しての場面設定が難しいものもある。

第3章では、大都市2園、地方中核都市2園、地方小都市1園の散歩活動の実践例を示した。比較では、幼稚園と保育所における違い、交通量における大都市と地方小都市の違いの他は、地域的な違いはあまり確認できなかった。ただ、いずれの園においても、園周辺の地理的環境を十分把握しており、それに応じた散歩活動を実践している。事例園においては、地域に応じた実践であることが特色と位置付けられる。

第4章では、領域環境「ねらい」と「内容」において事例園で重視している項目を確認した。その結果、自然的事象に対する興味関心をいかに向上させるかを、散歩活動の中で最も重視していることが分かった。そのため、保育者は、五感を活用させる工夫や散歩活動後へのつながりを意識しながら実践している。

以上から、幼稚園・保育所では、散歩活動を積極的に取り入れ、こどもと保育者共に高い評価を得ていることを浮き彫りにできた。散歩活動は、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域環境「ねらい」や「内容」において、具体的な活動として取り入れるよう指示はされていない。そのため、領域環境を扱う専門書の類でも、中項目以上として散歩活動の文言を確認できる機会は少ない。他方、筆者の教育・保育実習訪問の際に、散歩活動の実施について尋ねると、ほとんどの園で取り組んでいる。本調査でも明らかにように、散歩活動を取り巻く状況は、決してよくない。交通安全の課題、防犯対策の課題、引率教員の課題、時間調整の課題などがある。他方、散歩活動を今後取り止めようとしたり、縮小したりといった計画をしている園は、ほとんど聞かない。むしろ、散歩活動の機会を増加させたいという声が聞かれる。仮に課題を解決したければ、散歩活動を廃止することが最も簡単である。しかしながら、いくつかの課題はありながら、そのような判断をする園はほとんどない。

その理由として、散歩活動の有する高い教育的意義があることを指摘できる。具体的には、散歩活動のもつ多様性と多角性を挙げることができる。多様性は、自然的事象に限っても、植物、小動物（昆虫）、気象など種類に富むこと、多角性は、時期的な違い、時間的な違い、方向的な違いを指摘できる。すなわち、同じコースでも、季節、午前と午後、行きと帰りで触れる事象に変化が生じやすい。このようなことが、事象に対する興味関心を向上させ、結果として散歩活動の価値を高めている。

最後に今後の課題について述べる。今回用いた調査結果は、非常に限られたものであり、幼稚園・保育所の散歩活動の実態について一般化できる域にはない。その点をふまえ、散歩活動の実態について調査結果を蓄積していく必要がある。また、こどもの反応は、保育者を通じての評価であり、細かな点まで含んだものではない。よって、直接のこどもの反応について調査する必要性がある。加えて、北海道以外の地域における散歩活動の実態についても、調査結果として重要となる。とりわけ、季節による違いは大きく、積雪寒冷地以外のところでは散歩活

動の取り組み方が違う可能性もあろう。

これらの課題については、時期をみて公表していきたい。

付 記

本稿作成にあたり、調査目的の趣旨を理解していただき、聞き取り・アンケート調査のご協力を得た幼稚園・保育所の関係者の方には、記して感謝申し上げます。

文 献

- 奥井智久・芦田宏編（2008）：『新 子どもと環境』三晃書房。
- 菊地達夫（2006）：学校教育機関における地理教育の系統化－領域環境・生活科から社会科・地理歴史科へ－、『学習社会の振る舞いと研究（2）』二瓶社，pp.113-124.
- 菊地達夫（2007）：幼児教育における地図絵本の活用と意義－北海道の地域・環境認識を試みとして－，北方圏生活福祉研究所年報第13号，pp.15-23.
- 菊地達夫（2008）：幼稚園における地理的な教育保育の内容，地理教育研究第2号（全国地理教育学会誌），pp.28-32.
- 菊地達夫（2009）：保育者養成課程における散歩地図の作製と成果，地理教育研究第3号（全国地理教育学会誌），pp.76-80.
- 菊地達夫（2009）：幼稚園教育と小学校生活科の地理的内容について，地理教育研究第4号（全国地理教育学会誌），pp.1-2.
- 柴崎政行・赤石元子編（2009）：『保育内容 環境』光生館。
- 田尻由美子・無藤隆編（2006）：『子どもと環境』同文書院。
- 中沢和子（2007）：『改訂 子どもと環境』萌文書林。
- 横山文樹編（2006）：『保育内容・環境』同文書院。